



〈連載(224)〉

海事産業育成に力を入れる今治



大阪府立大学大学院・海洋システム工学分野・教授
池田 良穂

地域経済活性化のために地元海事産業振興に力を入れる地方都市が増えてきている。中でも、しまなみ海道で結ばれる今治市と尾道市が、相次いで「海事都市」の名乗りを挙げて、地方自治体自体が中心となって海事産業振興に積極的になっている。両市で、海事都市に関する講演会で「船」の話を見せて頂いたことがあるだけに、こうした動きが現実の産官学を巻き込んだ大きなうねりになりつつあるのが嬉しい。

5月下旬に、今治で開催された「今治海事展」、愛称「バリシップ」(バリは今治の「治」)を見学することができた。当初は、大学の見学ツアーとして団体旅行として企画したが、生憎、阪神地区が新型の豚インフルエンザの患者数が増加しつつあったため、団体旅行自粛となり、それぞれ個人的な旅行としての実施となったが、それでも20名余りが今治海事展を見学することとなった。

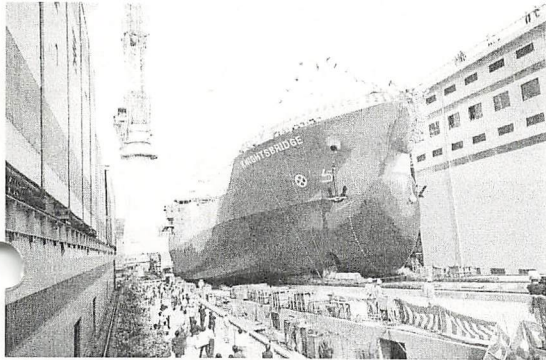
この今治海事展は3日間の開催で、最初の2日間はプロのための展示会や講演会が行われ、最終日の土曜日には一般向けの行事が行われた。最初の2日間は、連日2000

人余りの参加者があって盛会であったという。土曜日の一般向け行事は、きわめて多彩で、進水式、造船所見学、船用機器メーカー見学、帆船見学なども企画され、展示会会場と各地の見学会会場との間には無料の巡回連絡バスまで準備されていた。

まず、今治市内の造船集積地である波止浜地区にある浅川造船での進水式の見学から、我々の見学は始まった。浅川造船は、ケミカル船等の建造に特化したユニークな造船所であり、当日の進水船は7千載貨重量トンのLPG船であった。この進水式には今治市内の100人余りの小学生が招待されていた。子供たちを進水式に招待して、感動を与えると、いつかは「船を造ってみたい」という学生が出てくることであろう。先は長いが、こうした地道な努力が日本の造船業を支える優秀な技術者確保のためには欠かせない。船台には、赤いグースネック型のバルバスバウがひときわ目立つ赤い船体が進水を待っていた。進水に先立って、餅まきがあり子供たちが一生懸命に餅やお菓子を拾っていた。

船台での進水式は、いつ見ても感動的だ。支綱切断が行われ、船首のシャンペンが割れると、船はゆっくりと船台を滑り出す。

船主のクス球が割れ、たくさんの風船が空に舞い上がっていくなかを、船は次第に速度を増しながら海に入っていく。



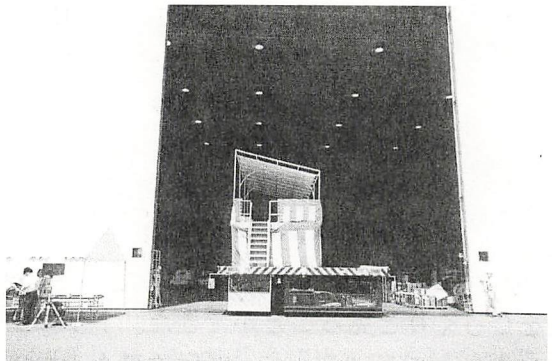
浅川造船で進水するLPG船「ナイトブリッジ」

この浅川造船の進水式見学および会社の概要説明を受けた後、隣の今治造船本社工場を訪れた。筆者の勤務する大阪府立大学の海洋システム工学科には、今治造船の寄付講座があり、ここでは専任教員が配置され、4年生および大学院の学生たちも配属されて、日夜、次世代船舶の研究・開発を行っている。この今治寄附講座の教員および学生たちも初めての今治造船本社工場の見学である。

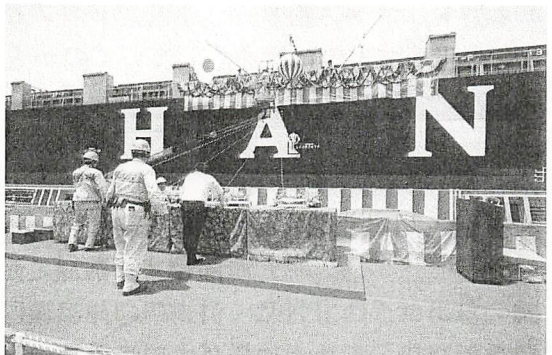
この日の見学会は一般市民向けのものとのことで、よく行われるような、順路を追って造船所での船の建造過程を見学するものかと思っていたが、全く違っていて造船所内を一大テーマパークのようにしたものであった。もちろん、材料の加工工場、ブロック組立工場、ブロックヤード、さらにはドックの中で建造中の船体などの見学ができるのだが、子供たちが飽きずに楽しめる企画が随所に展開されていたのである。ずらりと並んだ高所作業車によって運転を試みたり、工場屋内の天井クレーンからつるされた大きなフックで、ユーフォー・

キャッチャーをしたり、巨大なブロック搭載車が格納庫のような建屋からしずしずと登場して、その上から「餅まき」があったりと、多彩なイベントが行われていた。

艀装中のコンテナ船の船内見学、そして同船の命名式まで挙行され、まさに造船所内で行われている日々の活動が、一日で肌で感じることができるようになっていた。地域の基幹産業として、地域の中で成長していくという経営者の理念が垣間見える見学会であった。これまで、いろいろな造船所の見学会に参加したことがあるが、これほど市民の立場にたった企業見学会は見たことがなかった。



ブロック運搬車に乗って登場した式台。ここからの餅まきもあった。



命名式の準備風景

この今治造船の見学の後、筆者はしまなみ海道を北上して、因島にある造船所、石田造船建設を訪問した。3月に琵琶湖のトリマラン型遊覧船「megumi」船上で開催した「マルチハル船シンポジウム」において同社の石田社長に講演をして頂いて以来、客船建造に関する相談も受けていたので、一度、造船所を見学したいと思っていた。

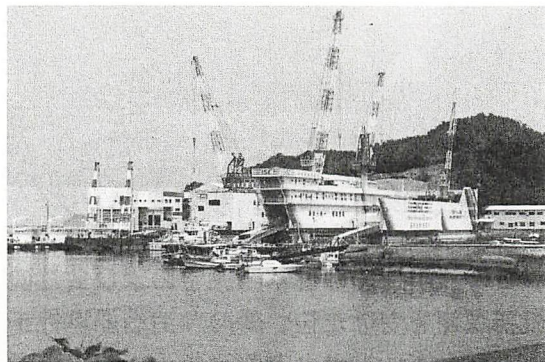
しまなみ海道を走ると随所で造船所のクレーンが見える。今治と尾道を結ぶしまなみ海道は、日本の一大造船集積地でもあることを目の当たりにした。

因島の一画に石田造船建設があった。船をイメージした塗装が施されているのは2本の船台横のドックハウスで、建設業も営む同造船所が自ら整備しただけあって、木をふんだんに使った内装の宿泊施設であった。

船台では、トリマラン型旅客カーフェリー「第二せきぜん」が修理中で、その船体をじっくりと見る事ができた。トリマラン化したことによって、船体重量も大幅に軽量化されて、燃費もよくなったとのこと。なかなかユニークなコンセプトに基づく省エネ型トリマラン船型で、今後、小型フェリーの世界で次第に数を増していくのかも

しれない。

艀装岸壁には、竣工後27年目という巡視艇「たまなみ」が修理中であった。リベットでつながれた船体に残る傷跡には、長年活躍してきた歴史が刻まれているようだった。



石田造船建設の造船所外観



船台上で修理中のトリマラン型旅客フェリー「第二せきぜん」

